

146. 昭和61年度滋賀県下における発掘調査の紹介

その3

27. 条里溝と中世木棺墓検出

蒲生町宮川 アリオオジ遺跡

白鳳寺院宮井庵寺の南 500m に位置する弥生時代中期から鎌倉時代前期にかけての集落跡である。

調査は、国営日野川農業水利事業管水路埋設に伴い実施したもので、約 1,100㎡ を対象とした。トレンチの北半部は、現代溝、瓦粘土採掘坑等により遺構が著しく破壊を受け遺存状況は悪かった。

検出した遺構は、弥生時代中期の溝跡・土坑、後期の土坑や平安時代前期から鎌倉時代前期の溝跡、木棺墓、土坑等があった。弥生時代中期の溝跡・土坑からは、土器類の他に石器片、凹石が出土した。平安時代から鎌倉時代の溝跡2条は、現代の畦畔溝とはほぼ並行に走っており、その時期は平安時代前期～中期（9世紀前葉から10世紀代）と平安時代後期から鎌倉時代前期（11世紀から13世紀前半）にある。その規模及び方位は前者が幅3.5m・N35°W、後者が幅2.0m・N30°Wであり蒲生郡条里(N35°W)と直接関連する遺構と考えられる。木棺墓は、溝跡の東で検出されたもので、規模は幅50cm・長さ1.55m・残存深15cmを測る。棺外には土師器小皿8点・白磁碗1点が埋納されていた。

溝跡等の遺構より出土遺物には、須恵器・土師器をはじめ灰釉陶器・瓦器・黒色土器があり、墨書土器(灰釉陶器坑)1点(判読不能)が含まれている。

今回の調査では、概ね弥生時代の集落遺構と条里関連遺構を検出したが、近接する野瀬遺跡でも同時期の遺構を確認しており、今後両遺跡の関連性を検討する必要がある。

(蒲生町教育委員会 北川 浩)

28. 平安前期の掘立柱建物群

蒲生町蒲生堂 蒲生堂遺跡

蒲生堂遺跡は日野川中流域左岸に所在する寺院跡と推定されている遺跡で、昭和56年度調査には、瓦器の焼成遺構と考えられる土坑等が検出されている。

今回の調査は、国営日野川農業水利事業管水路埋設に伴い実施したもので、約 600㎡ を対象とした。

調査の結果、平安時代前期の掘立柱建物跡4棟・溝跡・沼状遺構等を検出した。掘立柱建物跡は全て南北2間(柱間寸法2.3m等間)の規模をもつもので、切り合い関係から2時期の建物が想定される。主軸方位はN12~15°Wにある。掘立柱建物は、昭和56年度調査で同時期の建物群を検出した地に近接しており、大規模な建物群の存在が明らかとなった。

しかし、今回の調査においても寺院と直接関連する遺構は確認されず、寺院跡の存否については再度検討する必要がある。

(蒲生町教育委員会 北川 浩)

29. 大規模集落の一端検出

蒲生町鈴 堂田遺跡

堂田遺跡は、日野川中流域の右岸に位置する遺跡で石匙の出土により縄文時代の集落遺跡に推定されていた。調査は、県営ほ場整備事業に伴い実施したもので、約 3,600㎡ を対象とした。

調査の結果、弥生時代後期から鎌倉時代前期にかけての集落遺構を多数検出した。

検出した遺構は、I期:弥生時代後期から古墳時代前期、II期:平安時代前期、III期:平安時代後期から鎌倉前期の大きく3時期に分類出来る。

I期の遺構としては、竪穴住居跡1棟・方形周溝墓2基・溝跡数条が検出された。方形周溝墓の規模は、一辺18mと7mのものがある。II期の遺構は、溝跡1条がある。III期は、掘立柱建物跡6棟・土坑・溝跡等が検出された。掘立柱建物跡は、3間×3間が2棟(又は3棟)、2間×2間が2棟、1間×1間が1棟あり、3間×3間の建物の1棟は総柱の建物で東に1間分延びる可能性がある。もう1棟は、2間×2間に南西に廂の付くものと考えられる。他の建物も東柱をもつ総柱の建物が多いが、その全てが倉庫というより主屋の建物と判断される。これら建物の方角はN25~31°Wにあり1回以上の建て替えが認められる

今回の調査地の北方でも調査がなされ(県文化財保護協会実施)、同時期の遺構も多数検出されており、大集落の様相が窺える。

(蒲生町教育委員会 北川 浩)

30. 古墳時代後期の馬鋤検出

蒲生町鈴 堂田遺跡

堂田遺跡は日野川中流域の河岸段丘上に立地する縄文～鎌倉時代にかけての集落跡である。本調査は昭和61年度の県営は場整備・国営カン配事業に先立ち、約10,000㎡について実施した。

今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居4棟、古墳時代中期の竪穴住居4棟、古墳時代後期の竪穴住居3棟、掘立柱建物3棟、平安時代後期から鎌倉時代前期の掘立柱建物多数を検出した。その他、弥生時代中期から古墳時代後期の遺物を多量に含む自然河川跡を14条検出した。そのうちの3条からは古墳時代後期の馬鋤4点を検出している。また、注目すべきものとして、河岸に木杭を打ち込んだ遺構の周辺から5世紀後半の高坏・甕の完形品とともに100点近くの手づくねのミニチュア土器群を検出した。河川内出土遺物の大半は5世紀後半の土師器で、保存状態良好なものを多く含む。他に、初期須恵器を少量ながら含む。

平安時代後期から鎌倉時代前期の掘立柱建物群は、春日社領の市子荘に関連すると考えられる。とくに、46号排水路で検出された掘立柱建物群は市子荘の中心的な施設である可能性が高い。

(嗣滋賀県文化財保護協会 岡本 武憲)

31. 「麻生荘」の一端を検出か？

蒲生町田中 田井遺跡

蒲生郡蒲生町田井・大塚において、県営は場整備事業に伴う発掘調査を昭和62年2月末まで実施した。

今回の調査は対象地区が広範なため約5,000㎡の調査地(第1・2地区)を中心に概略を述べる。検出した遺構は、竪穴住居跡・掘立柱建物群・井戸・土坑・溝跡等である。

竪穴住居跡は13基検出した。住居跡はいずれも一辺4.5～6mの隅丸方形を呈し、深さ0.2～0.5mを測る。炉跡、貯蔵穴を有するものもある。また調査した数基は焼失しており炭化材・焼灰を検出した。出土遺物も多く、これらの遺物より弥生時代後期、古墳時代初期の時期差が認められる。

掘立柱建物は6棟以上確認した。2間×2間の建物4棟以上、3間×4間の建物2棟(建て変え時期については現在検討中)を検出した。前者のうち1棟は3方向に廂を有する建物で、これを除いて総柱建物である。柱穴や周辺の出土遺物より平安時代後期の集落跡と考えられる。

その他のトレンチでも住居跡、溝跡、河跡等多く検出した。この中でも6号小排水路に設定したトレンチ

では、溝状遺構から緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器・土師器を、また周辺より瓦も採集しており近くに寺院か館跡の存在が考えられる。

掘立柱建物群に関しては昭和60年度調査の市子遺跡からも同時期の建物群を検出しており、市子から田井周辺にかけての広い範囲に集落が営まれていたものと考えられる。また調査地を含めた地域が「麻生荘」(藤原家領、祇園社領)に比定されており、この関連遺跡である可能性が高いと推測される。

(蒲生町教育委員会 齊藤 博史)

32. 中世の生産(鍛冶・玉作り)遺跡

蒲生町田井・大塚他 杉ノ木遺跡

杉ノ木遺跡は蒲生郡蒲生町田井・大塚・市子松井に拡がり、田井遺跡の東方約500mの所に位置する。今回の調査は県営は場整備事業に伴う発掘調査で、昭和61年6月末から約5ヶ月を要して実施した。調査の結果弥生時代後期の竪穴住居跡、古墳時代の溝跡、土器溜り、平安後期～鎌倉時代初期の掘立柱建物、溝跡、土坑、鎌倉時代後期～室町時代の土坑、溝跡等を検出した。

竪穴住居跡は一部調査地外のため全容は把握できないが、かまどを設営しているものを1基検出した。田井遺跡で調査した住居跡では炉をもったものがほとんどで、炉からかまどへ移行する時期を考える上で貴重な資料といえよう。

溝跡は大小合わせると80条以上検出した。古墳時代の溝で幅1.5m、深さ0.8～1mを測る東西流のものがあり、溝に横たわるように板状の木材が検出され、簡易のせき止め機能をはたすものと推測される。

鎌倉時代後期～室町時代にかけての土坑は12基検出した。このうち8基は溜枘状の石組土坑で、信楽の甕、すり鉢をはじめ、石臼4個、玉砥石8点などが出土した。土坑内や周辺からコンテナ約20箱の鉄鐸や、ふいこの破片も数多く出土した。田井・大塚の集落周辺では、従来より水晶の採集が知られており、御代参街道沿いで発達した小鍛冶、玉砥等手工業生産を糧とした集落があったと考えられる。

杉ノ木遺跡は縄文時代、奈良～室町時代の集落跡と周知されていたが、今回の調査では、弥生時代・古墳時代をも含めた複合遺跡であることが明らかとなった。

(蒲生町教育委員会 齊藤 博史)

33. 中世の土壌墓検出

日野町石原 宮ノ前遺跡

宮ノ前遺跡は、蒲生郡日野町石原に所在する。立地は、南北を丘陵に挟まれた狭い溪谷内にあり、現状は水田である。

61年度の県営ほ場整備工事では、遺跡の一部の切土工事がおこなわれるため、工事地区の試掘調査をおこない、遺構面検出地点を対象に1,290㎡の発掘調査をおこなった。

主な遺構は、土壙墓（2箇所、SK001・SK002）、畔跡がある。また遺構は明確に確認されていないが、遺構面より上層の床土内に明銭が紐に通された状態で82枚が一括出土している。

SK001は長軸85cm、短軸78cmの方形の土壙墓である。側壁はほぼ垂直であり、側壁にそって壙底まで、薄く、黄灰色シルトが堆積しており、中心部には、黒色粘土（木炭混り）が堆積している。深さは最底部で25cmである。黒色粘土からは、須恵質の甕、灰釉椀が出土している。灰釉椀は10世紀代のものである。

SK002は、一辺100cmのやや不正な方形の土壙墓である。側壁はなだらかに底部に向かっており、最深部で15cm、埋土は暗褐色粘土である。SK002からは、須恵質甕が出土している。

明銭は、試掘時に出土している。調査区中央部の溝跡の上層に堆積している。黄灰色粘土層（地表下マイナス30cm）の中に紐に通されたまま小さな穴におしこめられたように丸まって出土している。しかし、周辺の精査にもかかわらず、埋納土壙の掘方は検出されなかった。

（勸誘賀県文化財保護協会 稲垣 正宏）



明銭出土状況

34. 濠に囲まれた館跡を検出

近江八幡市浅小井 高木遺跡

高木遺跡は、県営ほ場整備事業に伴うもので、安土町と近江八幡市の町境に位置する。

遺構は、幅3～4m、深さ0.8～1m、一辺50mの濠に囲まれた館跡の東北の一部で、井戸状遺構、掘立柱建物跡、柵列等が検出された。濠は、北側半分と、東辺、南辺の一部を確認した。掘形は舟形状で、15世紀に位置づけられる土師皿が内側より流れ込んでいる。



柱穴群と濠跡

掘立柱建物は、館の東北隅の一部で、建物規模は不明であるが、一部、掘形底に根石をすえており、かなり堅固な建物とみられる。又、根石のほとんどが火を受けており、あわせて包含層内に多量の焼土と炭が混入していることより、建物は火災により廃絶したものとみられる。遺構の主要部分は、西に広がっており、今回の事業の対象外となっており破壊はまぬがれている。

濠に囲まれた館跡としては、八日市市の後藤氏館跡、中主町の吉地大池遺跡等が著名であるが、今回の調査地は、当初、弥生時代後期の集落跡と予想していたが、15世紀における観音寺城、あるいは金剛寺城に関連する遺構の検出により、中世における浅小井周辺を再検討する必要が生じた。今後の周辺遺跡での同時期の資料の検出が期待されるところである。

（勸誘賀県文化財保護協会 仲川 靖）

35. 中世の集落跡を検出

近江八幡市西宿 久郷遺跡

久郷遺跡（事業名蔵ノ町遺跡）は、県営ほ場整備事業に伴うもので、昭和61年4月から8月にかけて実施した。なかでも、近江八幡市立東中学校の南では、11世紀末～13世紀後半にかけての集落跡を検出した。

遺構は、掘立柱建物を中心に三区に分かれ、各々は排水溝等により区画されている。とくに調査地の北側半分は、トレンチ中央に位置する径5mの井戸状遺構



遺構全景

につながる幅1mの溝を境にして、西に幅20cmの溝状遺構が等間隔に並ぶ畝跡と思われる遺構と、東に遺構の全くない水田跡と思われる箇所があった。それらを囲むように掘立柱建物跡がある。建物の規模は、5×4間、4×4間、3×3間の概ね3つのパターンに分けられる。又、一部の柱穴内には、「立柱式」の際、埋納したと考えられる完形品の土器が柱あたりの位置に納められていた。建物の棟方向は、古いものはやや北に振っており、除々に現条里の方向と平行する方位をとる。建物は、出土遺物や切合いより4時期にわたって建て替えを行っていると考えられる。

当地は、京極持清の弟実久郷（現在の久郷氏に続く）が養子となった中世上田庄を開拓した上田氏（初代上田次郎季政）が館を構えた推定地とされている。今回の調査では、上田氏の館跡を立証する資料の出土はみられなかったが、兵庫県の箱木千年家、岡山県新見庄地頭政所邸指図にあるような規模の建物跡を検出したことより、かなりの地位をもつ人物の住居跡とみられる。これまでに、県内はもとより全国でも、中世村落の住居を推定する資料が少ないだけに、その一端を解明する意味でも貴重な遺跡である。

（勸学館文化財保護協会 仲川 靖）

36. 紀年銘を持つ瀬戸系大鉢

中主町吉地



大鉢底部の墨書

吉地薬師堂遺跡(1)

本遺跡は中主町大字吉地字薬師堂を中心に所在する奈良～室町時代に及ぶ集落跡と考えられている。

調査は中主町の土地区画整理事業に伴うもので、都計街路部分約12,000m²を対象に昭和61年4月より実施した。調査区内は光明寺、光相寺、吉地薬師堂の3遺跡が隣接し合う複雑な地域である。

A地区西部では鎌倉時代後期の掘立柱

建物2棟、溝跡5条、土坑3基を検出した。掘立柱建物の1棟は4間×5間以上で、建替えがみられ、他の1棟は1間×2間以上の規模をもつと考えられる。建替時期に2棟は併存する様で、方位を同じくする。同方位の溝は1条あり、幅1.8m、深0.4mを測る。方位の異なる幅約3.5～3.9mの遺物を大量に含んだ大溝が

建物群の西側をはしる。

出土遺物には溝、土坑などから黒色土器碗、土師器皿、輸入陶磁の土器類や「面観世音菩薩」と墨書された木筒、箸などの木製品がある。

また、当遺跡の南辺に位置するE地区の溝跡から「至徳四年九月御新之内」と紀年銘を墨書した瀬戸系灰釉大鉢が出土し、注目を集めている。口径32cm、器高9cmを測り、器内外面に釉を施す。底部外面に三足を付し、その中央部に墨書している。

至徳四年は西暦1387年にあたり、大鉢そのものの実年代が判明するのみならず、供伴遺物の実年代を知る手がかりとして貴重な遺物である。

（中主町教育委員会 山田 謙吾）

37. 3重の掘を持つ環濠集落

中主町吉地

吉地薬師堂遺跡(2)



3重の掘跡

巡るものと思われ3～5m間隔で平行に並ぶ。堀幅4～5m、深さ0.7～1.5m、埋土は腐植物を多く含んだ粘質土が堆積しており、遺物は刀子と土師器片が少量出土した。

内郭の居住地は、東西19m以上、南北35m以上あり、井戸跡2基と礎石建物跡を検出した。なかでも直径2.4mの井戸跡は、樽形に組んだ井筒をもち、内部より長方形の銅製水滴（たて2.5cm、よこ5.1cm、高さ1cm）、釘、漆器碗、土師器片が出土している。

（中主町教育委員会 徳網 克己）

38. 第14次調査検出の木棺墓について

中主町西河原

光明寺遺跡

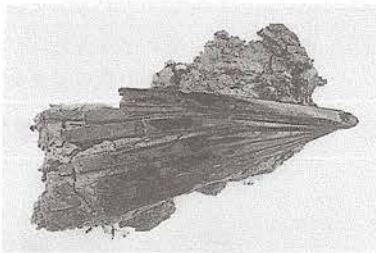
1. 調査地

調査対象地は、中主町西河原の約1,700m²で、光明寺遺跡第14次調査に当たる。本来、平安前期～江戸初期の遺跡であるが、本調査地では約12～14世紀の集落跡の一部が検出され、その南西端から20～30m東に離

れた畑地下より木棺墓が1基検出された。

2. 木棺墓の構造

木棺墓は、その主軸を南北にとり、その掘り方は、



黒漆塗扇屑

長辺2.2m・短辺0.95~1.1m・深さ(0.35m)の大きさの矩形である。この中に納めた木棺の規模は、長辺2.0m・短辺0.75mで、深さについては凡そ0.45m前後に推定でき、鉄釘は用いていないようである。

3. 出土遺物

棺内と棺外の遺物がある。棺内からの人骨の出土はなかったが、北側頭部上付近より黒漆塗扇骨と滑石製の温石が重なって出土した。棺外からは、北西角より近江型の土師器羽釜1個と、南側小口板南側より土師器小皿11枚が出土した。なお、ここでは棺内出土の扇について少し述べてみたい。本例は、黒漆蝙蝠扇と推定できる。扇には、楡扇(冬扇)と蝙蝠扇(夏扇)の二種があり、後者は、竹又は木あるいは鯨の鬚・鉄などを扇骨とし、紙・絹などを扇地紙としたものである。本例は、竹製の幅1cm・厚さ0.2cm・現存長20cmの9骨で、扇端より1cmに直径0.5cmの木製要が設けられている。蝙蝠扇の発生は不明な点が多いが、平安初期に本部によって作られたものといわれている。平安時代の遺例は、現存最古の津市四天王寺仏像胎内扇(康保年)を最古に、伝高倉天皇御寄進五骨蝙蝠扇、紀州秋津村経塚出土扇、京都市清涼寺五骨蝙蝠扇が知られるのみであり、貴重である。

木棺の被葬者は明らかでないが、棺内に納められた夏扇と温石の取りあわせは、被葬者への温かい心遣いが感じられて美しい。

(中主町教育委員会 辻 広志)

39. 土坑内より漢式系土器

野洲町富波 富波遺跡

調査地は、富波乙字竹々花798番地に所在し、過去の調査によって弥生時代末~鎌倉時代まで続く集落地とされる富波遺跡にあたる。

周辺には、県内でも最古の古墳とされる富波前方後方墳、舶載鏡3面をもつ古富波古墳、5世紀末の富波古墳、5世紀後葉につくられた五ノ里古墳等が集中している。さらに、大岩山銅鐸群と同時期頃の方形周溝墓が多数発見された五ノ里遺跡が隣接する。

検出された遺構は、掘立柱建物2棟、土坑2ヶ所、溝跡、方形周溝墓1基である。その内の土坑2には、

漢式系土器・土師器等が多量に出土した。さらに方形周溝墓は1辺5mであり、古墳時代前期のものと考えられる。また、北側には深さ60cmの後背湿地が認められた。

調査の結果、微高地上が居住区・墓域として利用されており、各時期において集落が断続的に営まれる。また漢式系土器が出土しており、渡来系氏族が近隣に居住しているものと推察される。富波遺跡は、弥生~古墳時代にかけて墓域として利用されており、住居地等は、若干グループをなすもののその範囲は狭い。(竹々花地区)、集落として木格的に富波の湿地が水田として利用されるのは、7~8世紀にかけてと思われる。

調査は、未だ完了されていないので、詳細については、不明確であるが、これらの事象の積み重ねによって、その実態が明らかとなろう。

(野洲町教育委員会 花田 勝広)

40. 7世紀前半の移動式カマド検出

野洲町小堤 小堤遺跡

小堤遺跡の調査は、小堤土地改良区が実施する土地改良事業に伴い、昭和61年度事業実施分約20,000㎡に対して、昭和61年9月19日から12月12日まで発掘調査を実施した。

今回の調査により6世紀終末から16世紀までの遺構・遺物を検出した。小堤土地改良事業区では、12のトレンチを入れ遺跡の範囲確認調査を実施した。以下各主要トレンチごとに説明する。

第1トレンチ拡張区

16世紀頃の池状遺構、石組の集水遺構や池からの排水溝を主要遺構として検出した。

主な出土遺物は、池状遺構から漆器椀・鉄鎌・陶器甕が出土した。石組集水遺構から硯、石組より石臼2点が出土した。

第2トレンチ

7世紀前半頃の掘立柱・溝・自然流路を検出した。それらの中で自然流路については、幅8m、長さ1.5m(検出面から)あり、大量の土器を検出した(S×101)。

出土遺物は、日常生活で使う雑器が主で、甌・長甕・碗・高環・移動式のカマド等の土師器が多く、出土遺物の約70%を占めます。これらの土器群は、古代小堤集落の人々が捨てたものであろうと考えられる。

第3トレンチ

ここでも、谷状の自然流路や集水遺構とみられる土坑を検出した。出土遺物は、自然流路から石臼・陶器甕が出土した。土坑(SK106)からは、硯・漆器椀4点・下駄1点やホウラクが数個体分出土し、いずれの遺物も16世紀代のものである。

第4トレンチ

ここでは7世紀前半の柱穴群を検出した。掘立柱建物は現在図上で確認できたのが2棟あり、土坑(SK101)から7世紀前半の甕・埴などの土器を発見した。
(野洲町教育委員会 杉本 源造)

41. 多面墨書人面土器を検出

野洲町小篠原

下々塚遺跡



墨書人面土器

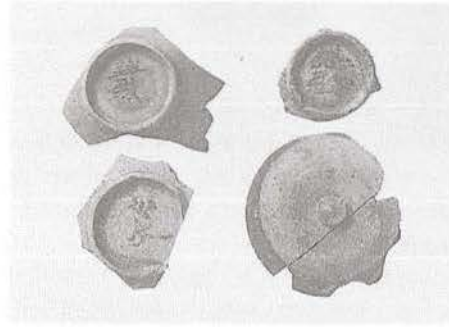
本年度調査は、先年度に続く字高田1109番地の調査と、同調査地に西接する字下々塚1131番地の二ヶ所で実施された。
字高田調査地は、今年度は県道に面したⅢ～Ⅳ地区が調査対象となった。発掘調査の結果、まずⅢ地区では、先年度調査地から続く弥生時代中期末～後期初頃の方形周溝墓8基が検出された他、古墳時代の竪穴住居、飛鳥時代の掘立柱建物群や溝跡などが同時にみついている。下々塚遺跡では、これまで方形周溝墓自体の存在が明確に確認されておらず、本例はこれを補充する良好な資料であろう。Ⅲ地区に西接するⅣ～Ⅴ地区は共に小規模なトレンチではあるが、南北方向にのびる旧河道の一部をそれぞれ検出している。このうちⅤ地区の旧河道内からは、墨描(書)人面土器が1点、ほぼ完形で出土している(写真)。墨描が施されているのは土師器の小甕で、体部中央に大きく最低5面以上にわたって人面が墨描されている。県下における墨描人面土器の出土例は少なく、本例は3例目である。また多面描写の例については、二面、四面などのものは認められるが、5面以上墨描するものはこれまで知られておらず、おそらく本例が初例と思われる。時期については、8世紀後半頃と思われる。次に字下々塚1181番地調査地であるが、こちらでも古墳時代初頃～平安時代に至る遺構・遺物が多く検出されているが、このうち平安時代の溝SD-07からは、平城京跡SD-650-B、北野廃寺SK-15に並行する9世紀末～10世紀初頃の良好な土器群が出土している。土師器、黒色土器、灰釉陶器など在地系、搬入系の多様な出土遺物は、時期的な稀少さもあり注目されるべき資料であろう。以上調査成

果の一端を明示したが、これからも折りに触れて、これらの資料の紹介に努めてゆきたい。
(野洲町教育委員会 森 隆)

42. 「越殿」、「懸大家」等の墨書土器検出

守山市笠原

笠原南遺跡



墨書土器

当遺跡は守山市荒見町字土切及び笠原町地先に所在する。調査は昭和58年度より県道笠原一荒見線の改良工事に伴って実施されてきた。本61年度の調査が最終である。調査対象地約2,800㎡を10月より実施した。この結果、笠原側対象地においては、前年度調査でも明らかになっている弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての遺物を包含する集落跡が引きつづき検出された。遺構は、掘立柱建物とおぼしき柱穴や集落を区切る溝等があり、さらにその外側に南北に走る溝が野洲川の南流に向かって幾本も流れていることがわかった。これによって、集落の北限を検出したことになる。

次いで実施した荒見側対象地においては、7世紀第2四半紀から9世紀中頃までの整然と並ぶ掘立柱建物群とそれを囲む溝が検出された。これらの建物は、現在東西に流れる小河川(当時も同じようにその下で検出している)を両端にした100m区間の間にすっぽりとおさまり、そのうちの中央60m区間にさらに幅2mの区画溝をめぐらせて建られている。建物の規模は2間×2間、4間×3間以上、3間×1間以上等様々な物が見つかっており、柱穴は掘方約60～80cmを測るものがあり、約20個程度に直径20cm台の柱痕を残すものがあつた。出土遺物には、黒色土器・須恵器(壺・甕・杯)・灰釉陶器(埴・皿)・尾張の緑釉等があつた。中でも須恵器の杯や灰釉埴の高台に「越殿」・「越家」・「懸大家」・「林家」と書かれた墨書土器が出土しており、奈良末～平安時代にかけての地方役人をつとめた豪族の館(越氏・懸氏)あとか、あるいは当地が古代赤見郷推定地であることからして、役所の一部または近接する遺構と考えられ注目される。

(脚滋賀県文化財保護協会 木戸 雅寿)